

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：12603

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820019

研究課題名（和文）インド北西部における社会再編の動態と<エスノスケープ>に関する社会人類学的研究

研究課題名（英文）

Social Anthropological Study on Dynamics of re-organizing society and rising of “ethno-scape” in North-Western India

研究代表者

小西 公大（KONISHI KODAI）東京外国語大学・研究員

研究者番号：30609996

研究成果の概要（和文）：本補助金により、集約的なフィールドワークをこなすことが可能となり、現地においていくつかの集団の移動の状況と、それに伴う社会再編の動態に関する具体的な状況を明確に把握することができた（下記詳述）。時間の制約により理論化の部分が道半ばであるが、エスノスケープが生み出す基盤となるローカリティが、時間や空間という変数を超えて、多様なアクターによる競合と交渉によって創造されていく、ある種ポリティカルなプロセスに注目していくことの重要性を見出すことができた。

研究成果の概要（英文）：

Incentive field work made it possible to comprehend the concrete situation of mobility and social reorganization of several communities, which was the main purpose of this study. Due to lack of enough period of time, theorizing the newly situated dynamics of social reorganizing was not completed, however the importance of the political processes which create the locality (that would be the dynamo of producing the ethno-scape) beyond the variable of time and space, could be singled out.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：グローバル化・ローカリティ・移動・エスノスケープ

1. 研究開始当初の背景

インドにおける社会研究に付きまとう困難は、当該社会における複雑な人間類型の在り方であり、また地域差という変数がもたらす全体像の捉え難さにある。また、人々のア

イデンティティは、入れ子状に多層化された各集団レベル（たとえば、神話的結合集団＝キスビー、内婚集団＝カースト、氏族集団、サブ・ジャーティなど）と接合しているため、その都度対峙する他者との関係によって可

変的であることも、「カースト」構造の捉え難さにつながっていた。

このような共時的な関係性のメカニズムを明らかにする研究の過程で、さらに重要な社会関係の変数として、通時的な「移動性」という問題が浮上してきた。90年代以降の経済自由化により、インドには急激な近代化・グローバル化の波が押し寄せてきている。申請者の調査地であるタール沙漠エリアにも同様の変化がもたらされ、多様な外部アクターが流入し、旧来の社会関係そのものが根底から再編されつつある。比較的安定していた集団間の社会的ネットワークは、新たな産業形態の発展に伴って起こる生計実践の変化によって分断されつつあり、それを支えていた関係性のイデオロムは、少しずつ忘却の一途を辿っている。

「移動」がもたらした帰結として、旧来の社会空間から乖離しつつあるそれぞれの社会が、自らの集団の在り方を再帰的に模索し、提示するようになったことがあげられる。急激な同エリアの観光化や外部アクター（旅行者、観光関連事業、芸能メディアなど）の流入、新たなアイデンティティ・ポリティクス戦略の適用（各政党の「後進階級」の取り込み合戦）等により、調査地の人々は絶えず他者からのまなざしを浴びるようになった。本研究は、人々がこれらの「モダニティ」の諸相の中で起こる広範な社会の再編成と、外部アクターとの絶え間ない交渉（表象の相克）の中で立ち現われてくる自らの集団認識の可変的光景を、「エスノスケープ」という概念で捉え、明らかにしていくことを目的とした。この概念は、もはや空間的に境界づけることのできない、他者とのリゾーム的邂逅と相互作用の中で構築されていく自己パースペクティブ化の動態を表している。本研究では、タール沙漠における二つの集団一すな

わち、「トライブ」ビールとムスリム芸能集団マーンガニヤールを対象とし、彼らのモダニティとの対話・交渉を通じて立ち現われてくるエスノスケープの諸相を、微視的に捉えようと試みた。この二つの集団の選定理由は、双方とも「支配カースト」=ラージプートへ儀礼的サービスを行う集団であり、また同じ女神信仰や世界認識（ナラティヴ）を共有しつつ密な社会空間を形成してきたこと、しかしながらモダニティの文脈では異なるベクトルをもつエスノスケープを構築しつつあり、周辺社会の動態を捉えるための比較対象として好例と考えられたからである。

2. 研究の目的

本研究は、インド北西部タール沙漠エリアを対象地域とし、主として90年代以降の経済自由化がもたらした近代化やグローバル化の影響による、現地の諸集団が実践する社会の再編成の動態を描き出すことを目的とした。旧来の、支配カーストとの儀礼的關係を中心とした比較的安定した社会関係が崩壊の一途をたどるとき、人々は新旧の多様な社会関係資本を駆使しつつ「移動」を繰り返し、新たな生計戦略を模索し続けている。この過程で噴出するのは、様々なアクター間でおこる表象やパースペクティブの相克の過程で構築されていく、空間に限定されない新たな創造的集団意識である。本研究ではこれを「エスノスケープ」と定位し、トライブ社会およびムスリム楽師集団の二つの社会を対象にしながら、その構築過程のメカニズムを明らかにし、理論化を目指した。ローカル／ナショナル／グローバルという多層的な要因が絡まりあう中で、人々は未曾有の社会変容にどのように対応し、交渉し、生計戦略を立てているのか。本研究はタール沙漠という周縁部に身を置き、人々の社会的実践を微

視的に捉えながら、現代インドが直面している「モダンシティ」の問題と人々の「生」との連関を、具体的に提示しようとする試みであった。

3. 研究の方法

本研究を遂行するために、以下の5つの段階に沿った研究・調査方法をとった。

(1) トライブ社会および楽師集団社会の置かれた社会変容の過程の解明

観光化の影響や外部アクターの流入により、彼らの生計実践にいかなる変化がもたらされているのか、また生計実践の変容が社会関係をどのように変質させているのかを明らかにする。

(2) 他者のまなざしの受容過程を捉える I ートライブ社会のケーススタディ

トライブ社会の人々の観光業の末端への参入が、彼らの世界認識に与える影響を捉える。彼らは、観光客をラクダに乗せて沙漠を横断する「キャメル・サファリ」の案内人として多く雇用されている。そうした直接的な外部アクター（観光客や観光エージェンシーなど）から受けるまなざしの中で、自らの世界の表象を強いられた彼らの戦略や「トライブ」としての自己認識の拡大に関して明らかにする。

(3) 他者のまなざしの受容過程を捉える II ー芸能集団のケーススタディ

芸能集団マーンガニヤールは、近年ホテル、レストランなどの観光関連施設における演奏や、国内外におけるパフォーマンスなどにおける需要が急激に高まってきている。これまでの儀礼的機会における演奏とは異なり、新たに付加された記号性と消費形態—「民俗音楽 folk music」「ジプシーの起源」「スーフィー（イスラーム神秘主義）音楽」など—および脱文脈化の圧力が、彼らの自社会に対する認識にいかなる影響を与えてい

るかを明らかにする。

(4) トライブ社会および楽師集団社会の再編成／組織化及び制度化の詳細

トライブ社会はこれまでの支配カースト中心の社会編成下において、各氏族集団（外婚単位）が結束の要となってきたが、グローバル化を経由することで、ビール（内婚単位）・アイデンティティが突出してきている。ビール性を強調した、村落自治組織（パンチャーヤト）等における政治運動も盛んになりつつある。一方芸能集団は、彼らの芸能のグローバルな需要に応える過程で「アーティスト集団」としての意識が高まり、集団的結合を模索する組織化の動きが高まってきている。こうした状況を微視的に捉え、新たな社会の再編成の流れを捉える。

(5) 双方の集団の社会編成の動態を捉える 理論的構築 —エスノスケープ論への接合

1～4でなされた研究蓄積を基に、グローバル化がもたらす生活世界を微視的に捉える学際的社会研究を参照にしつつ、調査地で起きている社会实践の動態を捉える理論的構築を目指す。

4. 研究成果

本研究の主眼は、新たな移動性が変質を余儀なくさせる諸集団にみられる、これまでとは異なるエスニシティの創出とその共同性を生み出す原理を明らかにすることにあった。集約的なフィールドワークの結果、指定トライブに関しては、都市への流入よりも、親族・姻族ネットワークという従来の社会関係資本を可能な限り拡大させながら、都市から離れた周辺部を移動する分散型のネットワークが形成されていたことが明らかになった。一方、ムスリム楽士集団は、自らの芸能に関する技能やレパートリーを変質させ脱文脈化することで、都市部を中心として生み出された近代

的な音楽産業に編入されていき、前者に比べると流動化が際立っていることが理解された。本研究では、グローバル化と旧来の社会構成の崩壊による周辺諸集団の社会再編の動態が多様であり、かつその再編がそれぞれの集団の持つ職能の伝統性の質や性格によって規定されていることを明らかにした。このことは、従来近代化論で提示されてきた「カースト」持続論や消滅論のもつ理論的な脆弱性を明らかにすることにつながった。

残念ながら、時間の制約によってエスノスケープ論への新たな理論的貢献を行う段階には至らなかったが、エスノスケープが生み出す基盤となるローカルなるものが、時間や空間という変数を超えて、多様なアクターによる競合と交渉によって創造されていく、ある種ポリティカルなプロセスへ注目していくことの重要性を見出すことはできた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 小西公大、『カースト』と『トライブ』—集団範疇をめぐる政治学、金基淑(編)『カーストから現代インドを知るための30章』明石書店、査読無、2012、36-48
- ② 小西公大、『マーンガニヤール—人間類型の迷宮への誘い』、金基淑(編)『カーストから現代インドを知るための30章』明石書店、査読無、2012、259-266

[学会発表] (計6件)

- ① 2013年2月11日民博共同研究「グローバル化の中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」研究会にて講演(国立民族学博物館)
「“Folk Music”が生み出されるとき—『レモン唄』にみるタール沙漠世界のモダニティ」

- ② 2013年2月3日 第4回東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」課題研究会にて講演(東京外国語大学本郷サテライト)

「『部族』をめぐる言説空間—大塚人類学とインドにおけるトライブ研究との接合可能性」

- ③ 2012年12月17日 白山人類学研究会定例研究会にて講演(東洋大学白山キャンパス)

「<対話性>の人類学に向けて—インド周縁部における神格の複数性/選択性から」

- ④ 2012年12月2日 2012年度NIHU(人間文化地域研究)研究員研究会にて講演(京都大学稲盛財団記念館大会議室)

「<対話性>の人類学に向けた試論—インド・タール沙漠のトライブ社会における信仰実践の複数性から」

- ⑤ 2012年8月3日 現代インド地域研究京都大学中心拠点「現代インド人類学セミナー」にて講演(京都大学)

「レモンをめぐる幻影—タール沙漠の芸能社会にみるモダニティ・ローカリティ・ジェンダー」

- ⑥ 2012年7月7日 東京外国語大学現代インド研究センター、FINDAS「若手研究セミナー」にて講演(東京外国語大学本郷サテライト)

「欲望は歌にのせて—タール沙漠ムスリム芸能集団にみる「語り」の可能性」

[図書] (計2件)

- ① 井上貴子・小西公大(共著)、『BRICsがわかる教科書(インド・中国編)』IEC、2012、1-107
- ② M. A. Konishi & Kodai Konishi(共著)、Jaisalmer: Life and Culture of the

Indian Desert, New Delhi: D.K.
Printworld, 2012, 1-153

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小西 公大 (KONISHI KODAI)

東京外国語大学・現代インド研究センター・
研究員

研究者番号 : 30609996